



～シーズン1 「SMクラブの受付」～

エピソード1 なぜ書くの？

しすてむ♥□きよたけ

「清武システムズ」は、世の中の何であるのか言っている本人すらわかっていない。ただ、「具体的なアイデアや意見ではなく、具体的な変化のための装置」であることをあげている。「何か変化をと思うが手立てがわからない」そのようなヒトやチームから、お声かけいただけるといいな～と思っている。しかし、僕自身が、清武システムズが何であるかわかっていなければ、声なんてかからないだろう。

ちょっと傲慢だが、わかりきっていることをするつもりもない…そんな潜在意識が、僕の中にあるのだと思う。ちょっぴり謙虚にいうと、僕ができることや理想を打ち出したところで、それが良いサービスであるなんて思わないから、あえてわからぬまま、積み重ねていってみようという試みでもある。ただ…そんなに自信があるわけでもない。が、何かと組み合わせたとき、何が起きる。そのコトを楽しみに過ごしている。

この原稿、「そんな最中に声がかかりました！それがSMクラブでした。」なんて言ったら、面白いだろうに…と思うのだが、そうではない。僕が、清武システムズと言

始めた頃、携わっていた場。それが、SMクラブでした♥□

清武システムズの始まりや中心ではなかったものの、しすてむ♥□きよたけにとって、全く関係ない場所だったと思えないのだ。

そこで、シーズン1である「SMクラブの受付」は、僕が体験をし、勝手に思ったことを勝手に綴っていこうと思う。

この職に強い好奇心があったわけでもなく、仕事を探していたら、たまたま人手不足だったみたいだし、即面接、即日決定だった。あえて添えておくと、「SM」を研究や調査の対象に選び、観察していたわけではない。

調査や研究の対象かのように参加をしようとしてくる人に「行ってみたい」なんて言われたときには、「来ないで」と言ってしまったぐらいだし、かかわりたくないな～、とまで思ったくらいだった（かといって、以降、かかわらなくなった相手はいないし、来たいなら金を用意し、予約をしてくれるならどうぞ、と仕事モードに切り替え、振る舞ったこともあった）。

こうした場を公開したいと思っているわけではない。むしろ、そうとしておいてくれと思っている人なのだ。

社会は、ひっそりとしている場も含めて存在しているのだし、人には、誰にも言えないことだって、むしろ、あえて言わないことだって、あるのだから。

では、なぜ書ちゃうのか。「SMクラブの受付」を通して、待機室にいる女の子やママ（と呼ばれる人）、他の受付の人たち、お客さんとかかわる中、指向が理解できず、業務が過酷だと思ったこともあったのだが、総合的に楽しかったからだ。あえて言う！変態とカテゴライズされるであろう人たちが、僕にとって鬱陶しくもあったが、好きだったし、今も好きだ。結局、僕が、その場やそこで過ごす時間や人たちに惚れていたことに気がついたから書くってわけ。

いつか、あの場で働いていた人たちが、このマガジンにたどり着いたとき、こんなことあったとか、そんな人いたとか、こんな話してた！とか、そんなつもりではなかった！！なんてことを思い出し、いろいろな感情を湧かせていただくのも悪くないかな、なんて思っている。

上がりを迎えた（辞めた）ら、なかった経験かのようにしてしまうこと、せざるを得ないこともある、と思う。むしろ、わざわざ言うまでもないと思っていたりもするだろう。プレイヤー真っ最中の時のほうが、そういう場合が多いかもしれない。話す相手や状況によりけりといった具合だろうか。

少なくとも僕はそうだったし、今もそう。でも、自分にとって確かな経験である

ことも事実だ。

いろいろ、ぼやいているが、結局のところ、先に述べた気持ちを彼女らに直接言うのって、照れくさかった。言った気もするが、チャラけて言ったに違いない。あれこれ真剣に考えていただなんて、わざわざ言うことでもないと思っていたからだと思う。だから、ここでひっそりと「SMクラブの受付」だった清武の経験を掘り起こし、少々理解し難かったことなんかもいじってみたりしながら、「僕、理解できなかったこともあるけど、好きだったんだよ」ってラブレター的な投稿をしちゃおっかな、と思っているのだ。

こんなこと言ってたら、彼女たちから「清武くん・キヨ・ウシジマくん・清P・お父さん・ヒゲチビ・チイサイオッサン、キモい！」って言われるだろう。それはそれで、快感ε-(´∀`;))

あとは…社会はそういう場も含めてある、ということをはひっそりと残しておこうという意図もある。世の中のみながみな惚れるわけではなく、性風俗に反対だったり、SMなんて興味ない人もいる。僕も大賛成の人ではない。でも、大反対でもない。だって、あるものはあるんだもの。性風俗の場も含まれた社会の中で、僕らは暮らしているのだから。

今回は、ここまで。

この時点で、女の子たちに気づかれませんよおに…もじもじ(´Д`)y—〜

次は、面接日のコトを、ダラダラと綴っていくと思う。これがま〜ビクビクしながら行ったのだが、僕にとって、なんだか意外だった。